

作況ニュース（第7号）

水 稲
大 豆

（発行：令和8年8月26日） （編集：令和8年8月24日）

発行：秋田県農林水産部

水 稲

m²当り籾数は平年並。登熟向上を意識した水管理を

—高温により成熟期は早まる見込み—

—ほ場観察により適期刈取りに努める—

1 今後の気象の見通し

（1）東北地方1か月予報（8月22日～9月21日）【令和8年8月20日 仙台管区气象台発表】

＜予想される向こう1か月の天候＞

天気は数日の周期で変わるでしょう。平均気温は高い確率70%、降水量は多い確率40%、日照時間は多い確率40%です。

週別の気温は、1週目（8月22日～28日）は、高い確率80%です。期間の前半は気温がかなり高くなる所がある見込みです。2週目（8月29日～9月4日）は、高い確率60%です。3～4週目（9月5日～18日）は、高い確率70%です。

次回の予報発表予定：1か月予報 毎週木曜日14時30分

3か月予報 9月18日（金）14時

【季節予報】

<https://www.jma-net.go.jp/sendai/data/tenkou/forecast/forecast.html>

【2週間気温予報 毎日随時更新】

<https://www.data.jma.go.jp/cpd/twoweek/?fuk=32>

2 県内の概況

（1）気象経過

【秋田地方气象台】

7月中旬： この期間、前線や気圧の谷等の影響により、曇りや雨の日が多く、前半は大雨の所もあった。特に12日は、暖かく湿った空気が流れ込んで大気の状態が不安定となり、広い範囲で大雨となった。

7月下旬： この期間、前線や低気圧等の影響により曇りや雨の日が多く、大雨の所もあった。旬平均気温は概ね平年並。旬降水量は概ね多く、かなり多い所があった。旬間日照時間は少なく、かなり少ない所があった。

8月上旬： この期間、高気圧に覆われて晴れの日が多かったが、1日は低気圧や前線の影響により大雨の所があった。旬平均気温は概ね平年並。旬降水量は概ね平年並または多い。旬間日照時間は多く、かなり多い所があった。

[旬統計値（秋田）]

	気温 (℃)	平年差 (℃)	階級区分	降水量 (mm)	平年比 (%)	階級区分	日照時間 (hr)	平年比 (%)	階級区分
7月中旬	26.2	+3.1	かなり高い	118.5	178	多い	23.5	51	少ない
7月下旬	25.0	0.0	平年並	185.0	337	かなり多い	28.6	50	少ない
8月上旬	26.4	+0.7	平年並	29.5	63	平年並	101.2	160	かなり多い

(2) 本田の生育

1) 移植栽培

① 出穂状況調査

各地域振興局調査による出穂期は、全県で7月31日(平年差－1日)であった。地域別にみると、県北は7月31日(同差－1日)、中央では8月1日(同差±0日)、県南では7月31日(同差－1日)であった。

表－1 出穂期の状況（各地域振興局調査、全品種の平均）

全県			県北			中央			県南		
本年	前年差	平年差	本年	前年差	平年差	本年	前年差	平年差	本年	前年差	平年差
7/31	±0日	－1日	7/31	+1日	－1日	8/1	+1日	±0日	7/31	±0日	－1日

注1) 全品種平均の地域としての出穂期

注2) 平年値：過去10年間（H28～R7）の平均値

② 定点調査結果

定点調査結果（8月20日調査）では、「あきたこまち」（県内64地点）の㎡当たり穂数は456本（平年比105%）、1穂当たり着粒数は70.7粒（同比94%）、㎡当たり粒数32.3千粒（同比99%）。また、出穂期は7月28日（同差－3日）と平年より早かった。

「ひとめぼれ」（8地点）は、㎡当たり穂数が471本（同比97%）、1穂当たり着粒数は68.4粒（同比99%）、㎡当たり粒数は32.1千粒（同比96%）であった。また、出穂期は8月1日（同差－1日）であった。

表－2 定点調査結果（各地域振興局8月20日調査）

品種	地区	出穂期			㎡当たり穂数			1穂当たり粒数			㎡当たり粒数		
		本年 (月日)	前年差 (日)	平年差 (日)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (粒)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (千粒)	前年比 (%)	平年比 (%)
あきたこまち	県北	7/28	0	－3	462	111	103	69.8	88	94	32.3	98	97
	中央	7/26	－1	－4	463	122	111	69.0	87	90	31.8	108	101
	県南	7/30	1	－3	450	111	104	72.2	85	95	32.5	96	99
	全県	7/28	0	－3	456	113	105	70.7	87	94	32.3	98	99
ひとめぼれ	中央	8/1	1	－1	471	104	97	68.4	98	99	32.1	102	96

注) 平年値：過去10年間（H28～R7）の平均値

2) 直播栽培

① 直播定点調査ほの生育状況

全県の生育は、幼穂形成期 7 月 16 日（平年差－3 日）、減数分裂期 7 月 27 日（同差－3 日）、出穂期 8 月 7 日（同差－2 日）、穂揃期 8 月 12 日（同差－2 日）。

本年の生育ステージは、減数分裂期までは高温の影響によりかなり早く推移した地点があったが、以降はやや鈍化し、出穂期は平年並の地点もあった。

幼穂形成期頃の調査では、草丈 69.7cm（同比 103%）、 m^2 当たり茎数 559 本（同比 94%）、葉数 11.2 葉（同差－0.1 葉）、葉緑素計値 36.2（同比 93%）であった。

穂揃期頃の調査では、 m^2 当たり穂数 443 本（同比 90%）、葉数 12.1 葉（同差－0.7 葉）、1 穂当たり着粒数 57.0 粒（同比 87%）、 m^2 当たり籾数 25.4 千粒（同比 78%）であった。生育初期の旺盛な生育から一変して、平年よりも茎数・穂数が少なく、最終葉数も少なかった。1 穂当たり着粒数はかなり少なく、 m^2 当たりもみ数がかかなり少なくなった。有効茎歩合が低く、葉色も淡かったため、穂数と 1 穂あたり着粒数の補償作用が弱く、1 穂あたり着粒数の減少につながり、 m^2 当たり籾数がかかなり少なくなった。

表－3 生育ステージ（湛水土中直播：品種 あきたこまち、各地域振興局調査）

設置 場所	幼穂形成期			減数分裂期			出穂期			穂揃期		
	本年 (月/日)	前年差 (日)	平年差 (日)	本年 (月/日)	前年差 (日)	平年差 (日)	本年 (月/日)	前年差 (日)	平年差 (日)	本年 (月/日)	前年差 (日)	平年差 (日)
農試	7/15	－3	－4	7/27	＋1	－4	8/6	＋1	－2	8/9	＋2	－3
大館市	7/18	＋4	－3	7/29	－1	－3	8/10	＋3	±0	8/14	±0	－1
井川町	7/13	－3	－6	7/26	＋3	－3	8/8	＋7	±0	8/12	＋4	－1
美郷町	7/17	＋2	－1	7/26	＋2	－2	8/4	＋3	－3	8/12	＋4	±0
横手市	7/20	＋6	－1	7/29	＋3	－2	8/9	＋5	－1	8/13	＋2	－1
全県	7/16	＋1	－3	7/27	＋2	－3	8/7	＋4	－2	8/12	＋2	－2

表－4 定点調査結果（湛水土中直播：品種 あきたこまち、各地域振興局：幼形期頃調査）

設置 場所	草丈			m^2 当たり茎数			葉数			葉緑素計値		
	本年 (cm)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (葉)	前年差 (葉)	平年差 (葉)	本年	前年比 (%)	平年比 (%)
農試	60.5	80	90	708	142	125	10.1	－0.9	－0.5	36.9	97	93
大館市	70.4	101	109	619	115	100	10.7	－2.1	－0.6	33.3	85	85
井川町	69.4	89	99	428	83	72	11.3	－1.2	－0.1	36.4	99	96
美郷町	75.8	100	110	500	96	91	11.4	－1.2	±0	40.4	124	107
横手市	72.6	93	105	538	78	84	12.3	－0.9	＋0.9	33.6	80	84
全県	69.7	93	103	559	103	94	11.2	－1.3	－0.1	36.2	97	93

表－5 定点調査結果（湛水土中直播：品種 あきたこまち、各地域振興局：穂揃期頃調査）

設置 場所	m^2 当たり穂数			葉数			1 穂当たり着粒数			m^2 当たり籾数		
	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (葉)	前年比 (葉)	平年比 (葉)	本年 (粒)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (千粒)	前年比 (%)	平年比 (%)
農試	516	119	110	12.0	－1.0	－0.6	59.6	80	85	30.8	95	94
大館市	394	79	75	11.6	－2.4	－1.3	50.0	75	83	19.7	59	63
井川町	362	76	75	11.5	－1.8	－1.3	60.5	88	94	21.9	67	70
美郷町	457	95	95	12.0	－0.7	－0.6	62.7	91	93	28.6	87	90
横手市	488	77	94	13.4	－0.6	＋0.5	52.4	87	79	25.6	66	74
全県	443	89	90	12.1	－1.3	－0.7	57.0	84	87	25.4	75	78

注）平年値：過去 10 年間（H28～R 7）の平均値

(3) 病害虫の発生概況

1) 斑点米カメムシ類

8月4半旬の巡回調査(80地点)における水田内での斑点米カメムシ類のすくい取り数(20回振り)は1.2頭(平年1.4頭)でやや少なく、発生地点率は28.8%(平年28.5%)で平年並だった。地帯別では、県中央部及び県南部における斑点米カメムシ類のすくい取り数は少ない～平年並だったが、県北部では水田内雑草が多いほ場を中心に斑点米カメムシ類のすくい取り数が多かった。

詳細は、令和8年8月21日に発表した令和8年度農作物病害虫防除対策情報第8号(以下、対策情報8号)を参照。<https://www.pref.akita.lg.jp/pages/genre/bojo>

2) いもち病

8月4半旬の巡回調査(80地点)における葉いもち上位2葉の発病株率は0.2%(平年1.0%)でやや低く、同地点率は7.5%(平年22.9%)で低かった。また、穂いもちの発病株率は1.3%(平年1.6%)、同地点率は30.0%(平年28.0%)でいずれも平年並だった。

3 当面の技術対策(8月下旬～10月上旬)

各地域振興局の定点調査によると、「あきたこまち」の出穂期は全県で平年より3日早かった。

7月中旬から下旬にかけて高温少照で経過し、ほ場間やほ場内、1株内でも出穂がバラついた。また、少照により令和6年と同様に稈長が長めになっている。8月に入ると日照が多く、登熟の条件は良好だが、登熟の進みはやや緩慢で、バラツキが目立つ。全穂数は平年並～やや少ない見通しであり(資料編 参照)、今後は登熟を向上する管理により、粒の充実に努める。

今後1ヶ月の気温は高い見通しであることから、登熟の向上を図るための適正な水管理を徹底するとともに、バラツキが大きい中でも刈り遅れによる品質低化を招かぬよう、籾の黄化程度を確認し、適期の刈り取りを徹底する。

(1) 登熟の向上を図る水管理

今後、9月にかけて高温になる見通しのため、きめ細かい水管理を続ける。落水は出穂後30日を目安とするが、ほ場条件や田面の硬化程度により30日を超えてかん水できるほ場は、落水を遅らせて登熟向上を図る。落水時期が早いと、葉色の低下、葉の枯れ上がり、根の機能減退等により登熟が妨げられ、収量、品質、食味の低下を招くことが多いため、早期の落水は避ける。

気温が30℃以上になる場合は、用水の確保が可能であれば、かけ流しかん水を行い地温を下げ、根の機能減退を防止する。かけ流しかん水が困難な地域では、落水期間の短い間断かん水や午前にかん水するなど、水分供給と地温の低下に努める。また、水不足等で用水の確保が難しい場合は、溝切り跡への通水等により、土壌水分を補充し、夜間の地温低下を図る。

フェーン現象等の乾燥した風の強い日は、湛水状態を保ち、蒸散による稲体の水分消耗を軽減する。特に出穂後30日以降においても、用水の確保が可能な場合は、かん

水し急激な枯れ上がりを防止する。

(2) 適期の刈り取りと刈り遅れによる品質低下防止

出穂期後の日平均気温の積算による刈り取り適期の目安は、「あきたこまち」等の早生種では950～1,050℃、「ひとめぼれ」、「めんこいな」、「ゆめおぼこ」等の中生～晩生種は1,050～1,150℃である。

本年は出穂期が平年より早く、また気温も高い日が多いため、積算値は順調に増加しており、刈り取り適期は、平年より早くなる見通しである。

また、日照時間による刈り取り適期の目安では、本年は十分な日照時間が期待できるため、積算気温による判定を主に考える。最終的な刈り取り適期は、各ほ場毎に籾の黄化程度を確認し、黄化程度が90%に達した時点とする。

参考に、水稻定点調査ほの出穂期とアメダス観測データの積算気温や積算日照時間から予測した地域別の刈り取り適期の目安を資料編p28の表－16に記載した。

刈り遅れによる大きな影響は、胴割れ米の発生による品質低下である。あきたこまち等の早生品種では、積算気温1,100℃を超えると発生割合が増加する。特に本年のような高温年は発生しやすいため、適期刈り取りのほか、収穫後の乾燥・調製においても細心の注意を払う。また高温登熟の場合、白未熟粒の混入は、刈り遅れるほど多くなることに留意する。

(3) 斑点米カメムシ類防除

8月20日に仙台管区气象台から発表された東北地方1か月予報によると、向こう1か月の気温は高いと予報されていることから、斑点米カメムシ類の活動が活発になると見込まれる。斑点米被害の増加が懸念されるため、対策情報第8号を参照し防除を徹底する。

1) 薬剤散布

斑点米は、登熟期後半から発生する割れ籾の増加に伴い、側部斑点米が主体となるので、2回目の防除が重要となる。そのため、出穂期24日後頃に畦畔を含めたほ場全体に茎葉散布剤を散布する。

茎葉散布剤はキラップフロアブル・同粉剤DL（使用時期は収穫14日前まで）又はエクシードフロアブル・同粉剤DL（使用時期は収穫7日前まで）とする。ただし、セジロウシカが多発しているほ場では、同時防除が可能なエクシード剤を選択することが望ましい。

殺虫剤を散布する際は、養蜂業者などと連携をとり、蜜蜂などへの危害防止に努める。また、農薬飛散による周辺農作物への影響が懸念される場合は、飛散しにくい散布ノズルを使用する等の飛散防止対策を講じる。

2) 雑草管理

畦畔・農道及び雑草地（法面や休耕田など）の草刈りは、稲の収穫2週間前以降に行う。

(4) 倒伏したほ場での対応

倒伏が発生すると受光体勢が著しく悪化し、登熟の低下による減収と穂発芽による品質低下を招くことから、倒伏した場合は次の事項を実施する。

- ① ほ場に停滞水が確認される場合は解消に努める。
- ② 早期に倒伏した場合は、速やかに4株ずつ束ねて立て直し、穂が乾燥するようにする。
- ③ 登熟後期の場合は早めに刈り取るとともに、追い刈りや横刈り等により刈り取り精度の向上に努める。
- ④ 穂発芽した場合は、刈り分けを行い品質低下を防止する。

(5) 大雨により浸水・冠水したほ場での対応

浸冠水した場合は、速やかな排水を図る。また、畦畔や用排水路等の点検・修繕を行い、適切な水管理に努める。

冠水した稲は、体内水分を失いやすいので、ほ場を急激に乾かさない。

倒伏した場合は、(4)の対策を講じる。

ほ場内への漂着物は、収穫作業に支障をきたすため、見回りを行い、除去に努める。また、収穫作業も漂着物に注意して作業を行う。

(6) 台風等による被害対策

台風は強い風雨を伴うため、倒伏や風水害、進路によってはフェーン現象や潮風害の原因となる。

倒伏した場合は(4)の対策、フェーン現象等で乾燥した風が強い日は湛水状態とする。

(7) 作業計画

作付品種の熟期と栽培面積を考慮し、刈り遅れにならないよう乾燥・調製能力に合わせた作業計画を立てる。

また、カントリーエレベーターやライスセンターを利用する場合は、早めに作業計画を組む。

(8) コンバイン収穫

コンバイン収穫は、損失粒やワラ・穀粒の詰まりが発生しないように、稲の生育量に合わせた作業速度で行う。

また、収穫時の籾水分は25%以下が望ましく、収穫作業は稲体が乾燥している午前10時～午後5時頃に実施する。

コンバインによる収穫作業の能率向上のため、次の点は特に留意する。

- ① 作業開始前には入念に整備・点検をする。
- ② 機械操作の習熟を図る。
- ③ こぎ胴回転数を規定内に抑え、脱ぶ損傷粒が発生しないようにする。

(9) 高品位米に仕上げるための乾燥・調製

乾燥・調製は、米を商品として仕上げる大事な作業である。作業の良否が米の品質と食味に影響するため次の点に留意する。

1) 乾燥作業の留意点

ア 乾燥機の特徴、操作手順をよく理解する。

イ 高水分籾の刈り取りを避け、わら屑等の混入を少なくして籾の循環をよくする。

ウ 乾燥前、中、後のそれぞれの工程で正確な水分測定を行う。

エ 水分が多い粃や活青米の多い粃などは、粃含水率が18～20%まで低下した時点で乾燥機を休止し、粃全体のテンパリングを行ってから仕上げ乾燥する二段乾燥を実施する。

オ タイマー設定時間はやや短めとし過乾燥を防止する。自動水分計のものでもやや高めの水分で一時停止し、温度設定する時は粃の状態を考え、過乾燥にならないようにする。

カ 乾燥の仕上がりは、玄米水分15%とする。なお、過乾燥になると胴割粒が発生するとともに食味が低下するので注意する。

2) 調製作業（粃摺り・選別）

〔粃摺り〕

ア 粃摺り作業は、穀温が高いと肌ズレ米が発生しやすいので、穀温が常温まで低下してから行う。

イ 粃摺り機の処理量は米選機の能力に合わせ、米選機の能力以上に玄米を供給しない。

ウ ゴムロールの摩耗程度を点検し、試し摺りを行い脱ぶ率が80～85%になるよう調節する。全自動の場合もゴムロールの摩耗点検は必ず行う。

〔選別〕

ア 網目は1.9mmを基本とし、整粒歩合80%以上を確保する。

イ 規定範囲内の流量で選別する。

(10) 農作業事故の防止【秋の農作業安全運動（9月10日～10月20日）】

秋の農繁期（9～10月）は、コンバイン等の大型農業機械を扱う機会が多くなることから、機械の操作等には十分注意する。過去10年間に於ける本県の農作業死亡事故のうち約2割がこの時期に発生している。

農作業事故の未然防止のため、無理のない作業計画を立てるとともに作業時は体調を整え、作業に適した服装で行う。また、作業機械の事前点検・整備を徹底し、操作には細心の注意を払う。

(11) 稲わら等の有効活用推進

秋田県公害防止条例で、10月1日から11月10日までの期間は稲わら等の焼却が全面的に禁止されている。稲わらや粃殻は、本田へのすき込みや堆肥などにして有効活用を図る。

(12) 農薬の飛散防止と安全使用の徹底

- ① 農薬散布前に使用農薬のラベルの適用作物・使用方法等を確認する。
- ② 農薬散布時は、周辺作物などへの飛散防止対策を徹底する。
- ③ 体調管理や服装・装備等を万全にし、散布作業は涼しい時間帯に行う。
- ④ 農薬散布後は、防除器具を確実に洗浄する。
- ⑤ 防除履歴は必ず記録する。

(13) 農作業中の熱中症及びクマ対策の徹底

- 1) 高温時の作業は極力避け、日陰や風通しの良い場所で作業する。
- 2) 喉の渇きを感じる前に、こまめに水分・塩分を補給する。
- 3) 単独作業は避け、複数人で作業を行うよう心がけて、時間を決めて連絡をとり合う。
- 4) 帽子や吸湿速乾性の衣服の着用や空調服や送風機を活用する。
- 5) 熱中症が疑われる場合には、作業を中断し、涼しい環境へ避難し水分を補給するなど応急処置に努める。症状が改善しない場合は早めに医療機関で診察を受ける。
- 6) 農作業中を含め、クマ対策を徹底する。(資料編の「クマダス」アプリの活用等)

【時期別・主要作業別指導事項】

月・旬	作業の種類	主 な 指 導 事 項
8 月下旬 ～ 10月上旬	登熟向上の水管理	○ 間断かん水を励行し、稲体の活力維持を図る。 ○ 落水時期は出穂後30日以降とする。
	刈り取り時期の判断	○ 品種別、ほ場別に刈り取り時期を正しく診断し、適期を逸せず刈り取りを行う。 ○ 粃の黄化程度90%を刈り取り適期とする。
	斑点米カメムシ類防除	○ 出穂期24日後頃に畦畔を含めたほ場全体にキラップ剤又はエクシード剤の茎葉散布剤を散布する。 ○ 草刈りは収穫2週間前以降に行う。
	倒伏したほ場での対応	○ 停滞水の解消に努める。 ○ 登熟後期に倒伏した場合は、早めに収穫作業に入る。 ○ 追い刈りや横刈り等により刈り取り精度の向上に努める。 ○ 穂発芽した場合は、刈り分けを行い品質低下を防止する。
	収穫・乾燥・調製	○ 水分の測定は、できる限りサンプル数を多くして行う。 ○ 二段乾燥で過乾燥の防止に努める。 ○ 網目は1.9mmを基本とし、整粒歩合80%以上に仕上げる。
	農作業事故の防止	○ 無理のない作業計画を立て、万全な体調で作業に適した服装で行う。 ○ 作業機械の事前点検・整備を徹底し、運転操作時は細心の注意をはらう。
	稲わらの有効活用	○ 稲わらや粃殻は焼却せずに堆肥にするなど有効活用を図る。 (10月1日から11月10日までの期間は稲わら等の焼却が全面的に禁止されている。)
	農薬飛散防止と安全使用	○ 散布前に使用農薬のラベルの適用作物・使用方法等を確認し、散布時は周辺作物などへの飛散防止対策を徹底する。 ○ 散布作業は涼しい時間帯に行い、適宜、休憩・水分補給をするなど体調管理に十分留意する。

大豆

子実病虫害の適期防除を

- － 降雨に備えてほ場の排水対策を徹底 －
- － 適期収穫による高品質大豆の生産 －

1 大豆の生育概況

(1) 全県の概況

播種作業の盛期は6月14日。5月下旬からの断続的な降雨により、平年に比べ1日遅かった。全県の開花盛期は7月31日。播種盛期の遅れや、6月下旬が日照不足で経過したことから、平年より2日遅かった。また、7月下旬の降水量が多かったことから、2回目以降の培土が実施できなかった地域があった。

(2) 農業試験場（大豆作況調査試験）

農業試験場における「リュウホウ」の開花期は、標播（6月3日播種）が7月25日（平年差－1日）、晩播（6月18日播種）が8月3日（同－2日）といずれも平年より早かった。また、播種から開花期までの日数は、標播が52日（同±0日）、晩播が46日（同±0日）といずれも平年並であった（表－1）。

標播の「リュウホウ」における8月19日現在の生育は、草丈は122cm（平年比115%）と平年より長く、主茎節数は15.8節（平年差＋0.4節）と平年並、分枝数は3.0本（同－0.5本）と平年より少なかった（表－2）。

晩播の「リュウホウ」における8月19日現在の生育は、草丈は109cm（平年比107%）と平年より長く、主茎節数は13.9節（平年差－0.1節）と平年並、分枝数は1.9本（同－1.0本）と平年より少なかった（表－2）。

表－1 農業試験場におけるリュウホウの播種期別開花状況

播種時期	播種日		開花期		播種から開花期までの日数	
	本年（月日）	平年差（日）	本年（月日）	平年差（日）	本年（日）	平年差（日）
標 播	6月 3日	－ 1	7月25日	－ 1	52	± 0
晩 播	6月18日	－ 2	8月 3日	－ 2	46	± 0

注）平年値はH28～R7年のうち、最大値と最低値を除いた8か年の平均値

表－2 農業試験場におけるリュウホウの生育状況

播種時期	播種日 （月/日）	調査日 （月/日）	草丈（cm）			主茎節数（節）			分枝数（本）		
			本年	前年比 （%）	平年比 （%）	本年	前年差 （節）	平年差 （節）	本年	前年差 （本）	平年差 （本）
標 播	6/ 3	7/30	104	110	124	14.3	－0.6	＋0.9	1.3	－1.6	－0.8
		8/10	119	119	118	15.7	－0.1	＋0.5	2.8	－0.7	－0.4
		8/19	122	118	115	15.8	± 0	＋0.4	3.0	－0.6	－0.5
晩 播	6/18	7/30	80	142	131	10.7	＋1.1	＋1.0	0.0	－0.1	－0.4
		8/10	103	145	122	13.5	＋1.4	＋0.6	1.4	＋0.3	－0.7
		8/19	109	112	107	13.9	＋0.4	－0.1	1.9	－0.1	－1.0

注）平年値はH28～R7年のうち、最大値と最低値を除いた8か年の平均値

7月中下旬は日照不足だったことに加え、気温も平年並から高く経過したことから、標播と晩播ともに草丈が平年よりも長くなった。

主茎節数は、高温により節数の増加が促進され、早期に最大節数に達し、8月19日時点では標播と晩播ともに平年並となっている。

分枝数については、標播では7月中下旬の日照不足により、分枝の発生が緩慢になったため、7月30日時点で平年差-0.8本と少なかった。8月からは日照が多くなったため、分枝数は8月10日時点で平年差-0.4本と平年並に回復傾向にあったが、その後高温少雨により、葉の裏返り等の水分ストレス症状が見られ、8月19日時点では平年差-0.5本と分枝の発生は停滞した。晩播も同様に、7月中下旬の日照不足によって分枝の発生は緩慢だった。8月からは日照が多くなったものの、分枝数は回復せず、8月19日時点で平年差-1.0本と、高温少雨による水分ストレスの影響が顕著であった。

2 技術対策

(1) 紫斑病防除の徹底

- 1) 防除は開花期の20～30日後に行う。また、莢への感染時期である開花10～35日後頃に降雨が多い場合は1回目防除の約10日後に追加防除を行う。ほ場の開花時期に合わせて適期に防除する。
- 2) 2回目防除を実施する場合は、耐性菌の出現を回避するため、1回目に使用した薬剤と異なるRACコードの薬剤を選択して散布する。
- 3) 刈り取りが遅れたり、刈り取り後脱穀せずに多湿状態で放置しておくると紫斑粒が増加するため、適期刈り取り及び速やかな乾燥に努める（防除基準p.53を参照）。

(2) マメシンクイガ防除の徹底

- 1) マメシンクイガによる子実被害は被害粒率が30%を超えることもある。
- 2) 大豆連作2～3年目以降に被害が増大する傾向にある。
- 3) 連作により密度が高まり被害が増大するので、連作ほ場では防除を徹底する。
- 4) 薬剤は次のいずれかを散布する（防除基準p.57を参照）。
 - ①アグロスリン乳剤、アディオン乳剤、パーマチオン水和剤は9月上旬までに1回散布する。
 - ②エルサン乳剤、グレーシア乳剤、スミチオン乳剤、トレボン剤（粉剤DL、乳剤、EW）、プレバソンプロアブル5、ヨーバルフロアブルは9月上旬に1～2回散布する。ただし、前年多発したほ場では2回散布とする。
- 5) 無人航空機で防除する場合は、9月上旬までにスミチオン乳剤、トレボンスカイMC、プレバソンプロアブル5のいずれかで2回散布する（防除基準p.403を参照）。

(3) カメムシ類防除の徹底

- 1) 子実を吸汁加害する主なカメムシ類はホソヘリカメムシ、ブチヒゲカメムシ、アオクサカメムシである。
- 2) 加害期間は若莢が着き始める頃から莢が黄熟する頃までにわたり、子実の被害は落莢、不稔粒、板莢、変色粒など加害時期によって異なる。
- 3) アグロスリン乳剤、アディオン乳剤、パーマチオン水和剤等で9月上旬までに防除する（防除基準p.57を参照）。

- 4) 無人航空機で防除する場合は、9月上旬にスミチオン乳剤、トレボンエアー、トレボンスカイMCのいずれかで2回散布する（防除基準p.403を参照）。
- 5) 8月下旬～9月上旬の散布は、マメシクイガにも有効である。

(4) 大雨による浸冠水被害軽減対策

明きょや排水路等の点検を行い、溝が崩れていたり流れが悪い場所は手直しするなど早めに補修し、停滞水の解消に努める。

浸冠水したほ場は、病害虫が発生しやすくなることから、発生状況に注意し、必要に応じて防除を行う。特に、茎疫病の発生が多くなるため、こまめなほ場巡回により、発病株の除去に努める。

(5) 排水対策の徹底

台風や秋雨による停滞水は刈り取り作業に影響することから、明きょや排水路の点検・補修などの排水対策を適切に行う。

(6) 収穫、乾燥、選別・調製の留意点

1) 収穫

収穫は、大豆の枯れ上がり程度、茎や子実の水分状態を見極めて計画的に行うことが重要である。また、コンバイン等の調整・試運転等は事前に済ませる。

また、水稻と共同の乾燥調製施設を使用する場合は、使用計画を調整し、刈り遅れを防ぐ。

- ① 大豆子実の外観品質は、成熟期以降から徐々に低下するため、成熟期の早いほ場から収穫する。ほ場内の大型雑草や落葉の遅い株はあらかじめ抜き取る。
- ② 汚損粒の発生を抑えるため、茎水分50%以下（茎がポキッと折れる頃を目安）で刈り取りを行い、作業は朝露により子実が湿った時間帯を避ける。
- ③ コンバインへの土の掻き込みは汚損粒発生の主原因であるため、土を掻き込まない刈高にあらかじめ調整する。また、排水性の悪いほ場や滞水し易い箇所は、コンバインの沈下に伴う土の掻き込みが予想されるため、事前にはほ場の滞水程度を観察する。
- ④ 脱穀後は風通しのよい場所に置く。乾燥施設等の都合で刈り取り後、直ちに乾燥作業を行うことができない場合は、保管場所や保管方法に配慮する。

2) 乾燥

乾燥前の子実水分と乾燥条件により、しわ粒や裂皮粒等の被害粒が発生する場合があるので注意する。また、乾燥温度の目安は、次のとおりである。

- ① 子実水分18%の場合 室温 +15℃以下
- ② 子実水分22%の場合 室温 +8℃以下
- ③ 子実水分26%の場合 無加温（常温通風）

※送風温度は30℃以下、乾燥速度は0.4%/h以下とし、子実水分を15%に仕上げる。

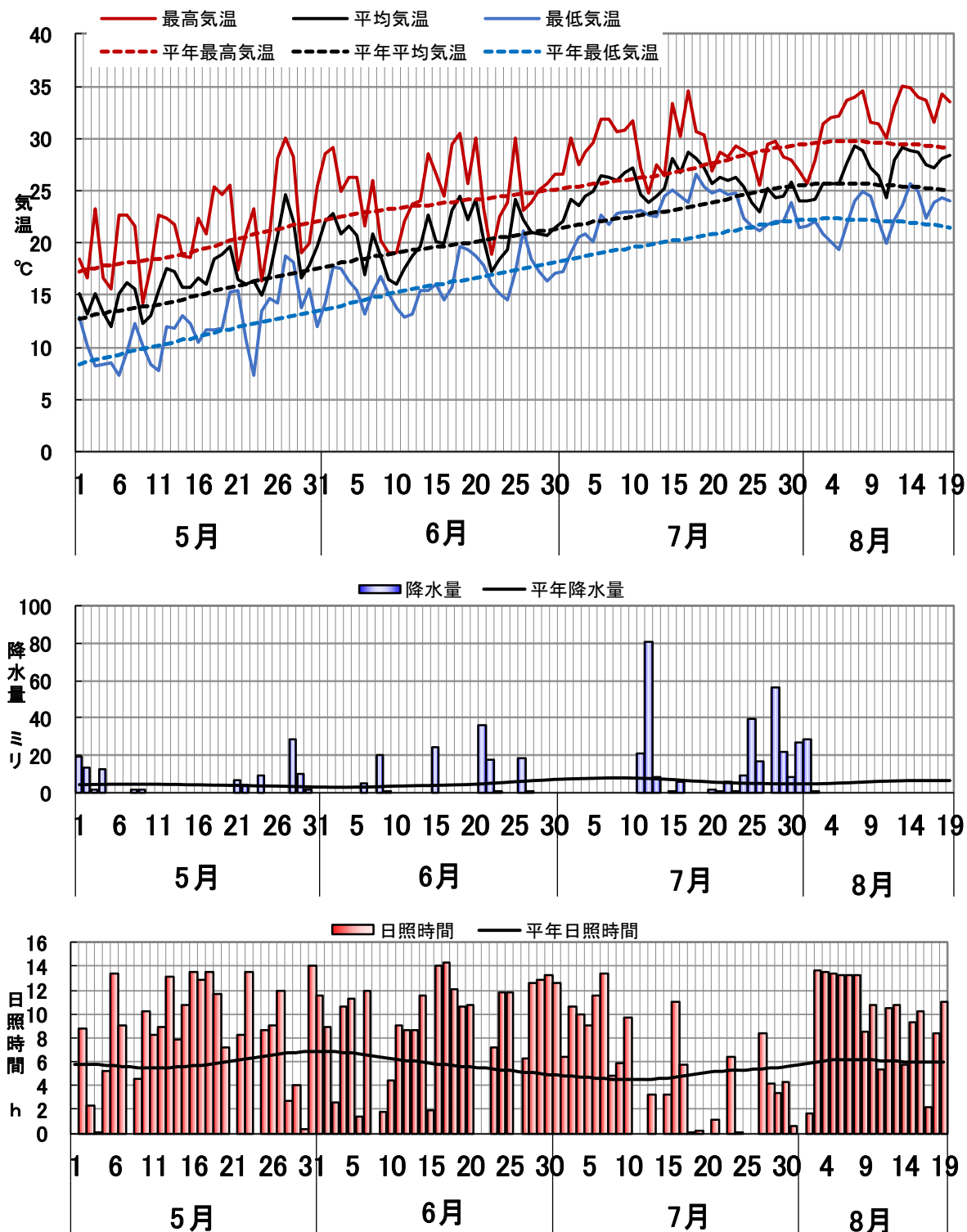
3) 選別・調製

仕上げ乾燥後、選別機で夾雑物や被害粒等を除去し、整粒歩合の高い高品質な大豆に仕上げる。粒径選別に用いる篩い目は、大粒は7.9mm、中粒は7.3mm、小粒は5.5mm、極小粒は4.9mmを使用する。

資 料 編

1 気象経過

(1) 令和8年5月1日から8月19日の気象経過図(観測地点：秋田地方気象台)



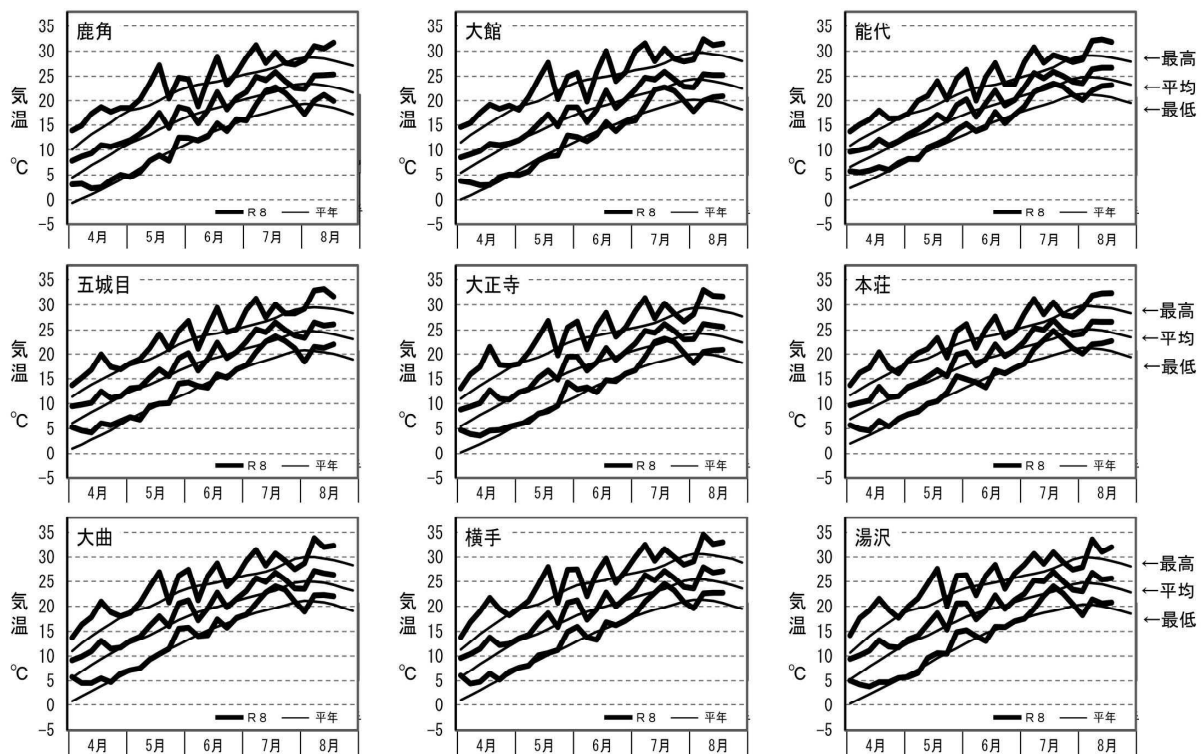
(2) 旬別気象状況 (秋田市)

(秋田地方気象台HPより)

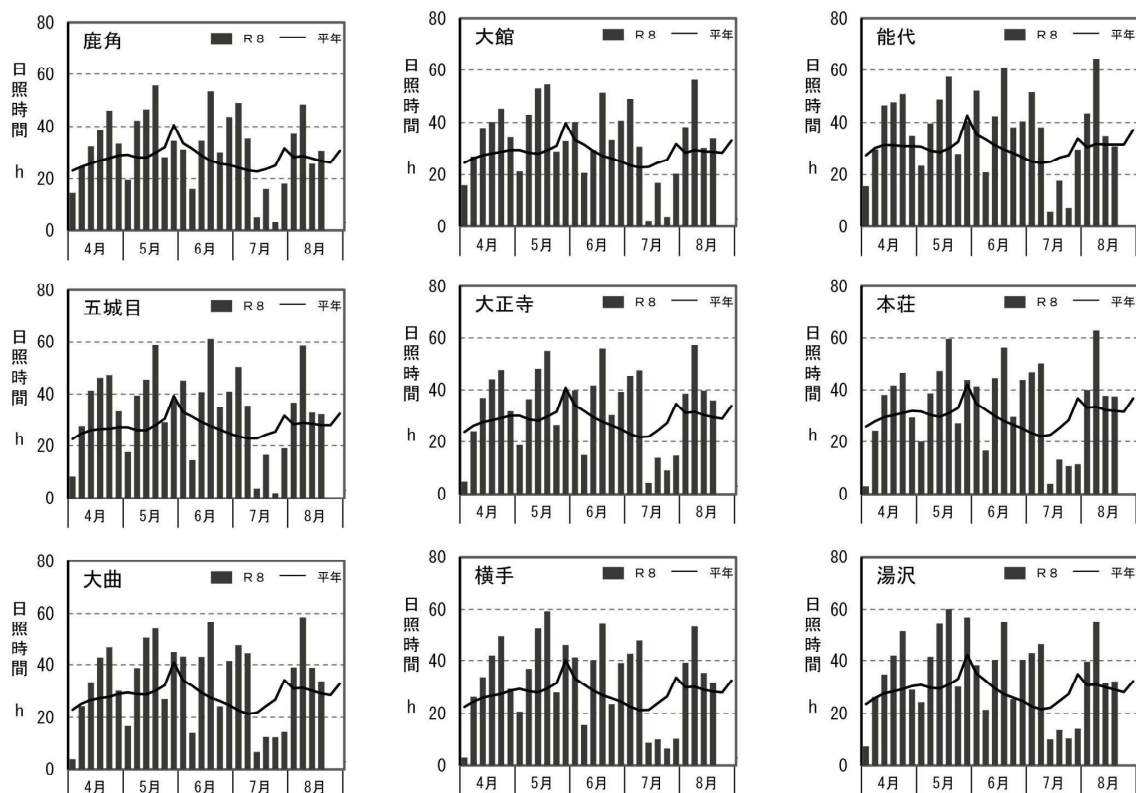
時 期 項 目	7 月上旬		7 月中旬		7 月下旬		7 月 計	
	本 年	平年比較	本 年	平年比較	本 年	平年比較	本 年	平年比較
平均気温(℃)	25.2	+3.1 ℃	26.2	+3.1 ℃	25.0	0.0 ℃	25.4	+2.0 ℃
降 水 量(mm)	0.0	0 %	118.5	178 %	185.0	337 %	303.5	154 %
日照時間(hr)	94.1	201 %	23.5	51 %	28.6	50 %	146.2	97 %

時 期 項 目	8 月上旬	
	本 年	平年比較
平均気温(℃)	26.4	+0.7 ℃
降 水 量(mm)	29.5	63 %
日照時間(hr)	101.2	160 %

(3) 地域別気象経過



図ー1 各地域の気温（半旬別、各地アメダス観測地点、8月4半旬まで）



図－２ 各地域の日照時間半旬別、各地アメダス観測地点、８月４半旬まで)

２ 定点調査結果

表－１ 定点調査結果（７月24日調査、品種：あきたこまち）

地域 振興局	調査点数	草丈			㎡当たり茎数			葉数			葉緑素計値		
		本年 (cm)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (葉)	前年差 (葉)	平年差 (葉)	本年	前年比 (%)	平年比 (%)
鹿 角	5	77.6	91	104	532	118	100	13.2	0.1	0.7	42.0	111	110
北秋田	9	81.3	95	105	547	114	111	12.9	0.0	0.3	39.6	100	102
山 本	9	80.9	96	105	484	115	104	13.0	0.1	0.4	41.0	115	106
秋 田	10	84.2	98	105	481	117	109	12.9	-0.3	0.2	38.0	110	99
由 利	2	72.7	87	97	546	122	118	12.5	-0.3	0.5	39.5	117	105
仙 北	10	78.3	90	102	510	117	109	12.9	0.1	0.6	40.6	108	104
平 鹿	11	80.8	95	104	466	115	98	12.8	-0.3	0.4	42.5	105	104
雄 勝	8	81.2	95	104	519	121	111	12.8	0.1	0.3	38.4	102	95
全県平均	64	80.6	94	104	503	117	106	12.9	-0.1	0.4	40.2	107	103
7月25日の 理想生育量		目標	下限	上限	目標	下限	上限	目標	下限	上限	目標	下限	上限
	県北	72	69	74	504	479	529	12.0	11.8	12.2	39	38	40
	中央	70	69	72	491	456	527	11.9	11.7	12.2	38	36	39
	県南	74	72	75	437	420	454	12.3	12.1	12.5	38	37	39

表－２ 定点調査結果（７月24日調査、品種：ひとめぼれ）

地域 振興局	調査点数	草丈			㎡当たり茎数			葉数			葉緑素計値		
		本年 (cm)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (葉)	前年差 (葉)	平年差 (葉)	本年	前年比 (%)	平年比 (%)
秋田	2	76.6	92	104	540	112	100	12.0	-0.8	-0.3	39.9	124	112
由利	6	80.0	95	102	522	108	102	12.6	-0.2	0.2	37.3	121	108
中央地区平均	8	79.2	94	103	526	108	101	12.5	-0.3	0.1	38.0	122	109

表－３ 定点調査結果（７月24日調査、品種地区別）

品種	地区	草丈			㎡当たり莖数			葉数			葉緑素計値		
		本年 (cm)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (葉)	前年差 (葉)	平年差 (葉)	本年	前年比 (%)	平年比 (%)
あきたこまち	県北	80.3	94	104	519	115	106	13.0	0.0	0.4	40.7	108	105
	中央	82.3	96	104	492	118	111	12.9	-0.2	0.4	38.2	111	100
	県南	80.1	93	103	496	118	106	12.8	-0.1	0.4	40.7	105	101
	全県	80.6	94	104	503	117	106	12.9	-0.1	0.4	40.2	107	103
ひとめぼれ	中央	79.2	94	103	526	108	101	12.5	-0.3	0.1	38.0	122	109

表－４ 定点調査結果（８月20日調査、品種：あきたこまち）

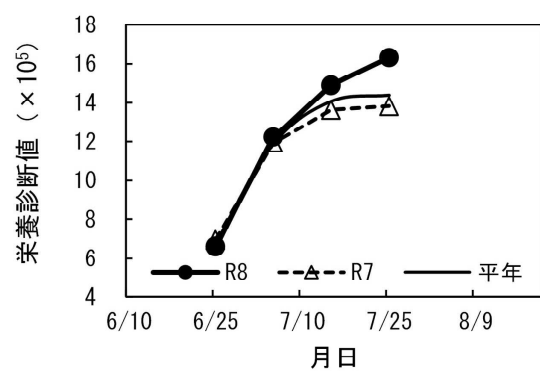
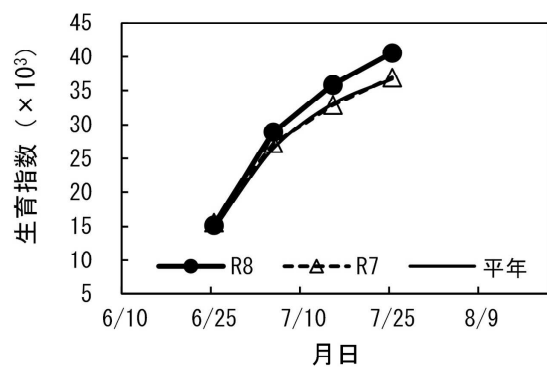
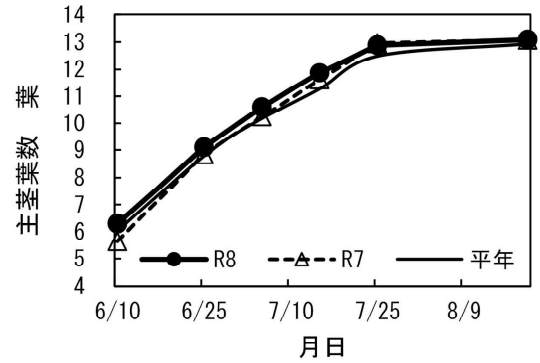
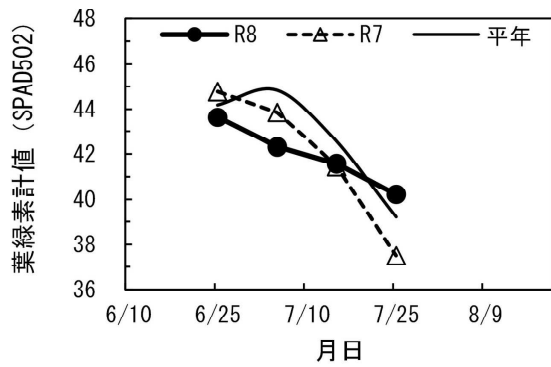
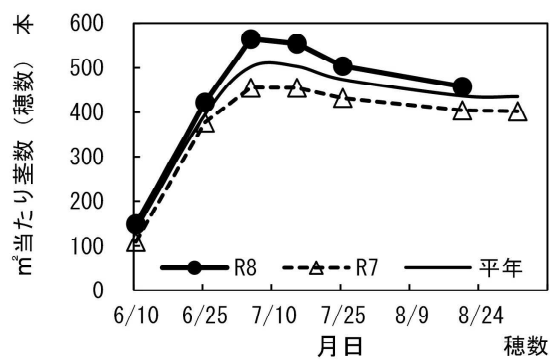
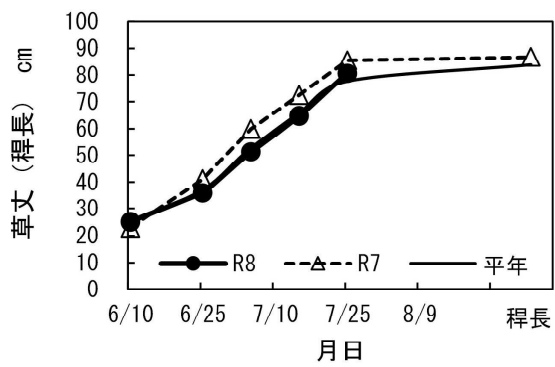
地域振興局	調査点数	出穂期			㎡当たり穂数			1穂あたり着粒数			㎡当たり籾数		
		本年 (月日)	前年差 (日)	平年差 (日)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (粒)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (千粒)	前年比 (%)	平年比 (%)
鹿角	5	7/29	1	-3	464	114	97	68.6	83	98	31.8	96	96
北秋田	9	7/28	1	-2	485	108	107	69.0	92	95	33.2	99	101
山本	9	7/27	-2	-5	437	111	101	71.3	87	91	31.6	98	94
秋田	10	7/26	-1	-4	464	123	112	70.2	86	91	32.4	108	102
由利	2	7/29	-1	-3	459	116	107	63.1	91	87	29.0	107	94
仙北	10	7/29	1	-3	448	108	103	71.2	86	95	31.9	93	99
平鹿	11	7/31	1	-3	434	111	101	74.5	83	95	32.6	92	98
雄勝	8	7/29	0	-3	474	116	108	70.6	90	95	33.3	105	102
全県平均	64	7/28	0	-3	456	113	105	70.7	87	94	32.3	98	99
収量構成要素の目標値 (目標数量:570kg/10a)					県北	中央	県南	県北	中央	県南	県北	中央	県南
					450	440	415	70	69	73	31.5	30.4	30.3

表－５ 定点調査結果（８月20日調査、品種：ひとめぼれ）

地域振興局	調査点数	出穂期			㎡当たり穂数			1穂あたり着粒数			㎡当たり籾数		
		本年 (月日)	前年差 (日)	平年差 (日)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (粒)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (千粒)	前年比 (%)	平年比 (%)
秋田	2	8/8	8	3	496	107	99	66.0	99	96	32.1	105	94
由利	6	7/30	-1	-2	463	103	97	69.2	98	100	32.1	101	98
中央地区平均	8	8/1	1	-1	471	104	97	68.4	98	99	32.1	102	96

表－６ 定点調査結果（８月20日調査、品種地区別）

品種	地区	出穂期			㎡当たり穂数			1穂あたり着粒数			㎡当たり籾数		
		本年 (月日)	前年差 (日)	平年差 (日)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (粒)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (千粒)	前年比 (%)	平年比 (%)
あきたこまち	県北	7/28	0	-3	462	111	103	69.8	88	94	32.3	98	97
	中央	7/26	-1	-4	463	122	111	69.0	87	90	31.8	108	101
	県南	7/30	1	-3	450	111	104	72.2	85	95	32.5	96	99
	全県	7/28	0	-3	456	113	105	70.7	87	94	32.3	98	99
ひとめぼれ	中央	8/1	1	-1	471	104	97	68.4	98	99	32.1	102	96



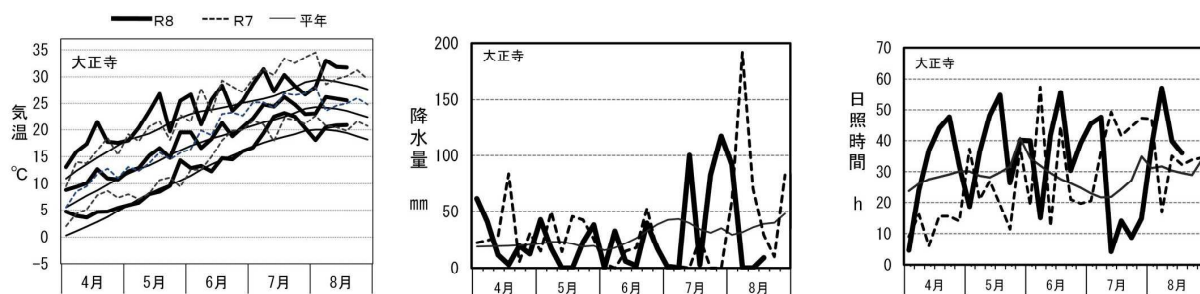
図－３ 定点調査（あきたこまち全県平均）の生育グラフ

3 関連成績

(1) 気象感応試験

1) 稲作期間の気象（7月5半旬～8月4半旬）

7月5半旬～8月1半旬の気温は、平年を下回り、8月2半旬以降は平年を上回る気温経過だった。8月2日までは梅雨による雨天が続いたものの、梅雨が明けた8月3日以降は少雨だった。日照時間は、7月3半旬～6半旬は少なく、8月1半旬以降は多かった。



図－4 令和8年の稲作期間中の気象経過
(半旬別、アメダス観測地点“大正寺” 8月4半旬まで)

2) 農試ほ場の生育概況

<減数分裂期の生育状況>

標植は、草丈73.1cm（平年比100%）、 m^2 当たり茎数588本（同118%）、葉数12.9葉（平年差+0.4葉）、葉緑素計値36.4（平年比103%）だった。また晩植は、草丈70.6cm（同93%）、 m^2 当たり茎数485本（同106%）、葉数12.7葉（平年差-0.1葉）、葉緑素計値36.5（平年比106%）だった。

両区とも茎数は平年より多く、草丈は標植で平年並、晩植で平年をかなり下回った。また葉緑素計値は、両区で平年をやや上回った。

減数分裂期は標植で平年より6日、晩植で5日早かった。

表－7 農試気象感応試験(減数分裂期)の生育状況

試験区	減数分裂期	(平年差)	草 丈			m^2 当たり茎数			葉 数			葉緑素計値		
			本年 (cm)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (葉)	前年差 (葉)	平年差 (葉)	本年 (%)	前年比 (%)	平年比 (%)
標植	7月17日	(-6日)	73.1	94	100	588	139	118	12.9	+0.2	+0.4	36.4	113	103
晩植	7月21日	(-5日)	70.6	88	93	485	103	106	12.7	±0.0	-0.1	36.5	116	106

注1) 移植日: 標植 5月15日、晩植 5月25日

注2) 調査日: 標植 7月17日、晩植 7月21日

注3) 平年値は、標植はH12～R7、晩植はH29～R7の平均。

<穂揃期の生育状況>

標植は、草丈96.4cm（平年比104%）、 m^2 当たり茎数525本（同118%）、葉数13.1葉（平年差+0.2葉）、葉緑素計値37.2（平年比96%）だった。また晩植は、草丈95.2cm（同100%）、 m^2 当たり茎数462本（同109%）、葉数13.1葉（平年差±0.0葉）、葉緑素計値36.3（平年比101%）だった。

標植の出穂期は平年より6日早く、晩植では1日早かった。減数分裂期以降、晩植の生育が緩慢になった。両区とも茎数は平年を上回った。

表－8 農試気象感応試験(穂揃期)の生育状況

試験区	出穂期	(平年差)	草 丈			㎡当たり茎数			葉 数			葉緑素計値		
			本年 (cm)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (葉)	前年差 (葉)	平年差 (葉)	本年 (%)	前年比 (%)	平年比 (%)
標植	7月25日	(-6日)	96.4	103	104	525	146	118	13.1	±0.0	+0.2	37.2	105	96
晩植	8月1日	(-1日)	95.2	98	100	462	112	109	13.1	-0.1	±0.0	36.3	102	101

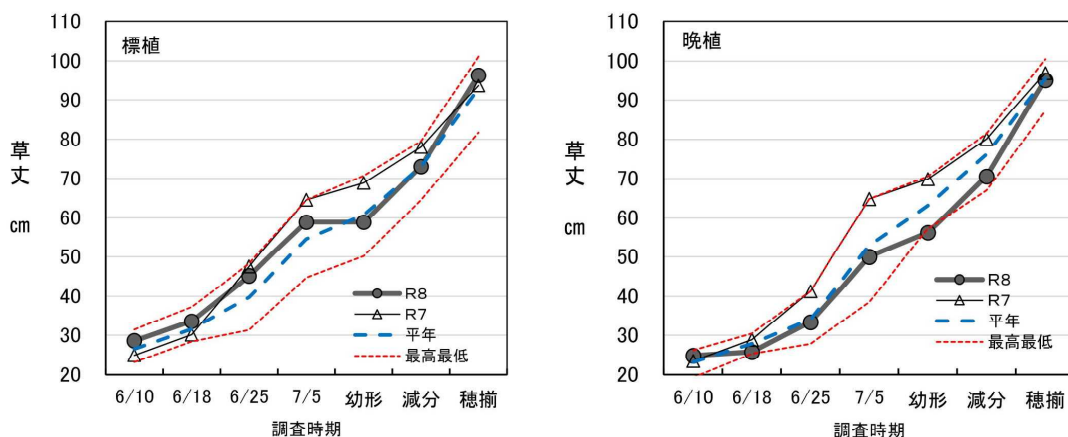
注1) 移植日: 標植 5月15日、晩植 5月25日
 注2) 調査日(穂揃期): 標植 7月28日、晩植 8月3日
 注3) 窒素施用量: 基肥7g/㎡、減数分裂期追肥2g/㎡
 注4) 茎数は出穂した茎と未出穂の茎の合計
 注5) 平年値は、標植はH12～R7、晩植はH29～R7の平均。

<これまでの生育経過図>

① 草丈

標植は、幼穂形成期までは平年より長く経過したが、幼穂形成期以降は平年並に経過した。穂揃期では平年よりやや長かった。晩植は、移植以降、平年を下回って経過したが、穂揃期では平年並だった。

両区とも減数分裂期以降に急伸した。

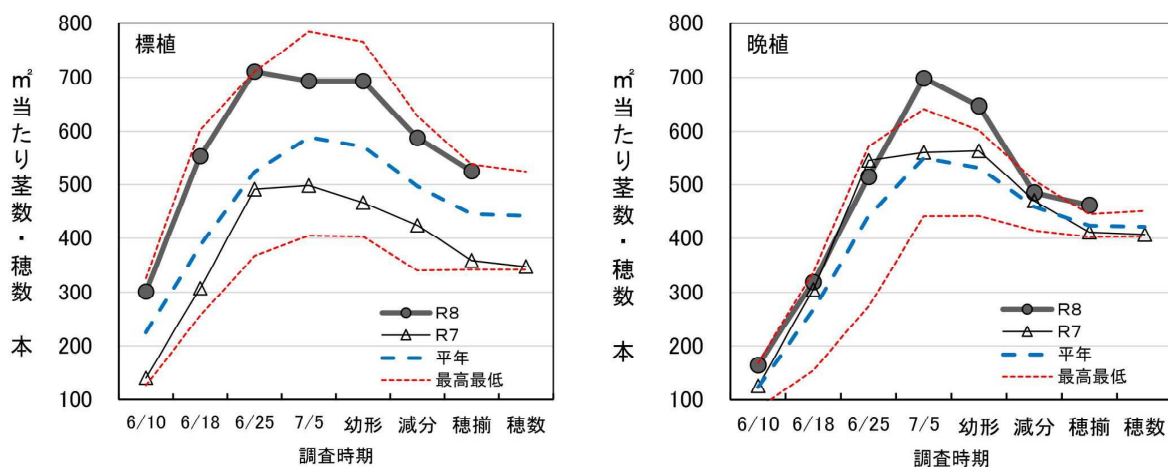


図－5 草丈の推移

注) 図中の2本の点線は過去の生育の最高値と最低値を示す

② 茎数・穂数

標植の茎数は6月上旬から穂揃期まで平年を大きく上回って経過した。晩植は6月下旬以降平年を大きく上回り、7月上旬は過去の最高茎数を上回ったが、減数分裂期に大きく減少した。

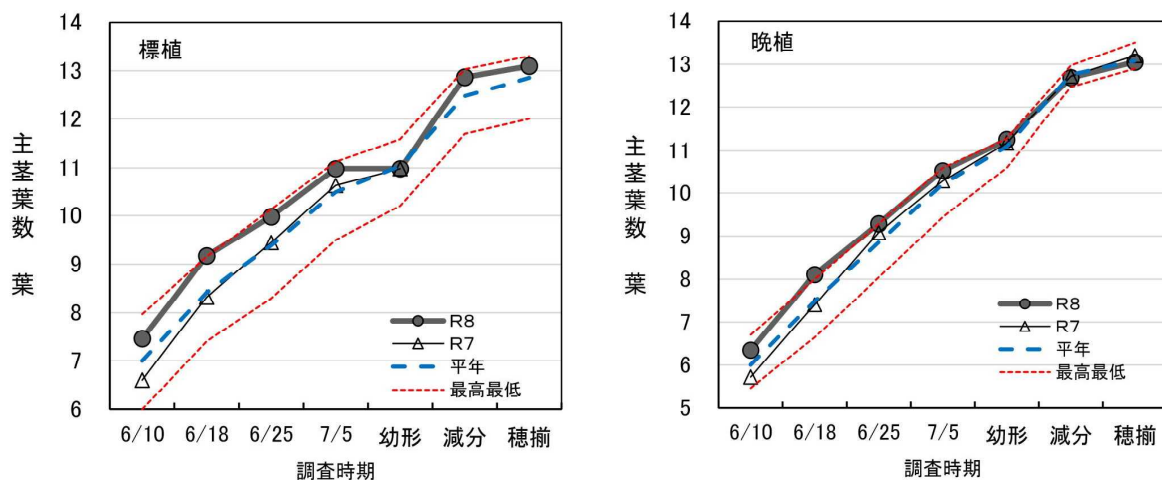


図－6 茎数・穂数の推移

注) 図中の2本の点線は過去の生育の最高値と最低値を示す

③ 葉数

両区とも6月上旬から平年を上回る経過だった。しかし晩植は減数分裂期以降、平年並にまで停滞した。

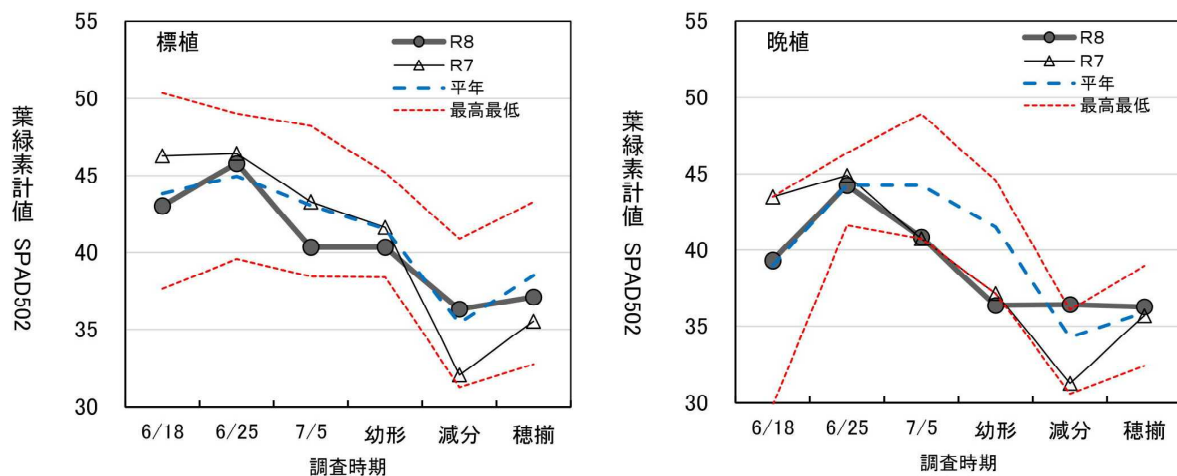


図－7 主茎葉数の推移

注) 図中の2本の点線は過去の生育の最高値と最低値を示す

④ 葉色（葉緑素計値）

標植は、幼穂形成期に平年を少し下回ったものの、概ね平年並の経過だった。晩植は、7月上旬から幼穂形成期まで平年を大きく下回って経過したものの、穂揃期は平年並だった。



図－8 葉緑素計値の推移

注) 図中の2本の点線は過去の生育の最高値と最低値を示す

⑤ 出葉期

標植は、生育初期は2～3日早く出葉し、8～10葉までは3～4日早く、11葉以降は5日早かった。晩植は、概ね2～3日早く出葉した。

表－9 出葉期

試験区	年次	出葉期								
		5葉	6葉	7葉	8葉	9葉	10葉	11葉	12葉	13葉
標植 (5月15日移植 基準)	R8	5/21	5/27	6/2	6/7	6/13	6/18	6/26	7/6	7/12
	R7	5/25	6/1	6/7	6/12	6/17	6/23	6/30	7/7	7/15
	平年	5/24	5/29	6/5	6/11	6/16	6/22	7/1	7/11	7/17
	平年差	-3	-2	-3	-4	-3	-4	-5	-5	-5
晩植 (5月25日移植 基準)	R8	5/29	6/2	6/8	6/14	6/18	6/24	7/2	7/10	7/18
	R7	6/1	6/7	6/12	6/17	6/21	6/25	7/3	7/11	7/18
	平年	5/31	6/6	6/11	6/16	6/21	6/27	7/4	7/13	7/21
	平年差	-2	-4	-3	-2	-3	-3	-2	-3	-3

注1) 標植の平年値は、H12～R7までの平均。晩植の平年値は、H29～R7までの平均。

注2) 移植時葉数の平年値は標植は3.4葉、晩植は3.6葉。本年は標植は3.4葉、晩植は3.8葉。

⑥ 生育ステージの平年比較

標植は、幼穂形成期が7月5日（平年差－5日）で過去最速で、減数分裂期は7月17日（同－6日）、出穂期は7月25日（同－6日）だった。晩植においても、幼穂形成期は平年より3日早く、減数分裂期も6日早かった。しかし、出穂は鈍化し、出穂期は8月1日で平年より1日早い程度だった。

表－10 生育ステージ

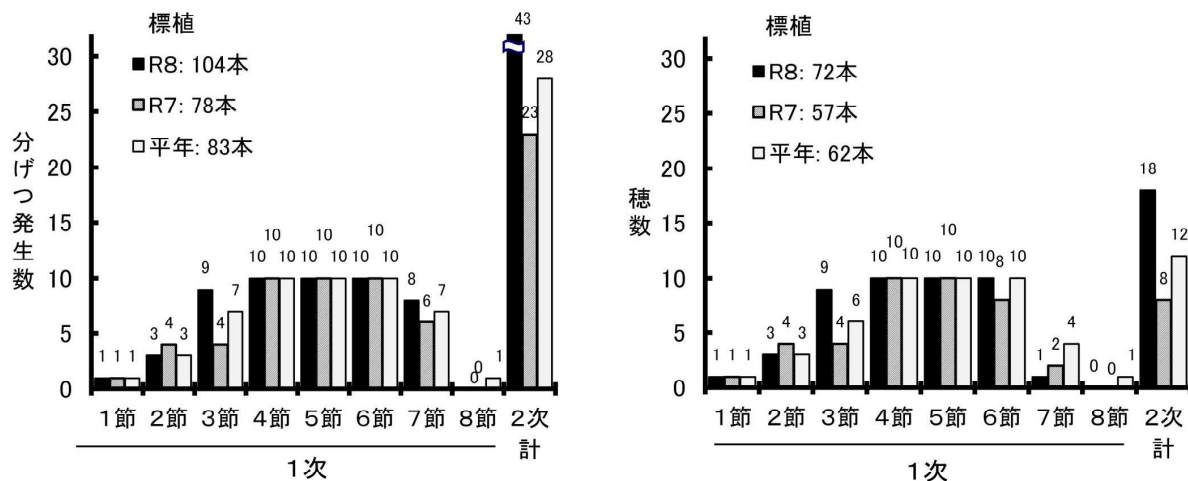
試験区	移植 基準日	幼穂形成期			減数分裂期			出穂期			成熟期		
		R8	R7	平年	R8	R7	平年	R8	R7	平年	R8	R7	平年
標植	5/15	7/5	7/7	7/10	7/17	7/18	7/23	7/25	7/25	7/31	9/3	9/13	
	(平年差)	(-5)			(-6)			(-6)					
晩植	5/25	7/11	7/11	7/14	7/21	7/22	7/27	8/1	7/29	8/2	9/9	9/15	
	(平年差)	(-3)			(-6)			(-1)					

注1) 中苗移植、平年は標植ではH12～R7、晩植ではH29～R7の平均。

注2) 本年移植日 標植 5/15、晩植 5/25

⑦ 有効穂の発生次位・節位

標植の調査株の分けつ発生は、1次3節と2次分けつで平年よりかなり多かった。
有効化した穂も、1次分けつでは3節、2次分けつで多かった。

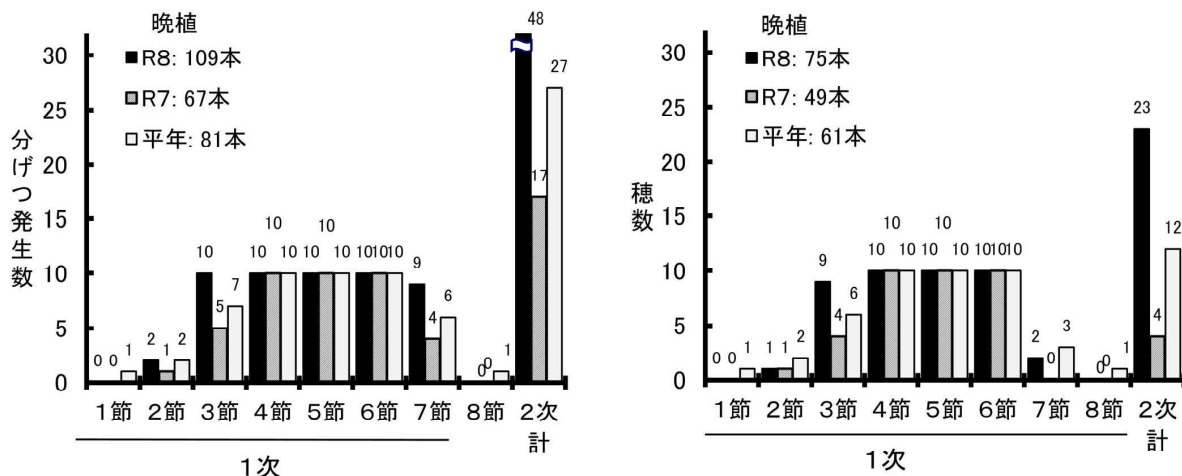


図－9 標植の次位別の分けつ発生数（左）と穂数（右）（10個体あたり本数）

注1) 平年はH13～R7の平均値

注2) 図中の茎数計、穂数計は、主茎を含めた合計。四捨五入の関係で、総数と各節の合計は一致しない場合がある

晩植の発生分けつは、1次分けつでは3節と7節で平年より多く、2次分けつも平年よりかなり多かった。有効化した穂も、1次分けつでは3節、2次分けつで平年よりかなり多かった。



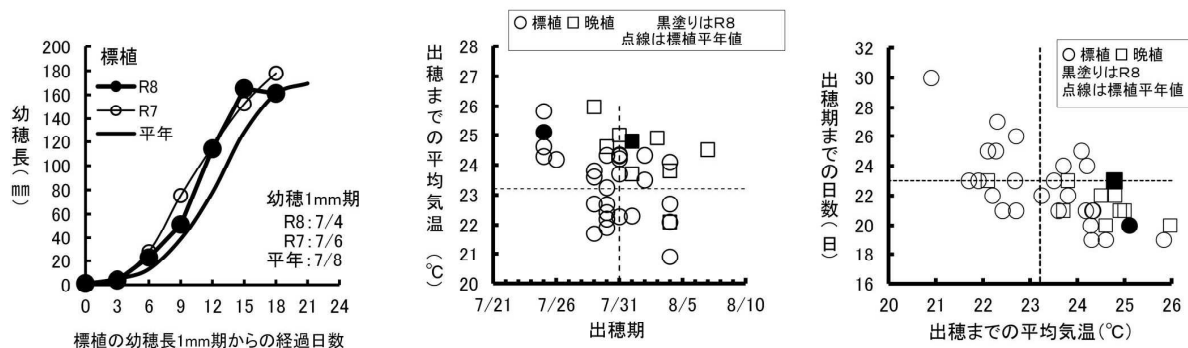
図－10 晩植の次位別の分けつ発生数（左）と穂数（右）（10個体あたり本数）

注1) 平年はH29～R7の平均値

注2) 図中の茎数計、穂数計は、主茎を含めた合計。四捨五入の関係で、総数と各節の合計は一致しない場合がある

⑧ 幼穂長と出穂期

標植の幼穂1mm期は、平年より4日早い7月4日だった。幼穂長は、幼穂1mm期の6日後で平年よりかなり長くなり、以降は平年を大きく上回って経過した。出穂期は7月25日で平年より6日早く、幼穂1mm期から出穂期までの平均気温は25.1℃で平年より1.9℃高く、その日数は20日で平年より3日短かった。



図－11 幼穂長と出穂期、気温の関係

注) 平年値は標植におけるH12～R7の平均(晩植は省略)

⑨ 出穂期10日後の籾殻の大きさと籾数

標植の籾殻長は6.82mm(平年比94%)、籾殻幅は3.44mm(同100%)で、前年同様に籾殻長が短かった。1株平均穂数は25本(同117%)、1穂平均籾数は69.1粒(同100%)、1株当たり籾数は1,728粒(同118%)だった。穂数が平年よりかなり多いため、1株籾数は平年よりかなり多かった。

晩植では、籾殻長は7.09mm(平年比98%)、籾殻幅は3.54mm(同101%)で、籾の大きさは平年並だった。また、1株平均穂数は22.5本(同111%)、1穂平均籾数は60.2粒(同80%)であり、1株当たり籾数は1,355粒(同89%)だった。1株平均穂数は平年より多かったが、1穂平均籾数がかなり少なかったことにより、1株平均籾数は少なかった。

表－11 出穂期10日後の籾の大きさ、穂数、籾数調査

調査項目	標植				晩植			
	R8	R7	平年	平年差・比(%)	R8	R7	平年	平年差・比(%)
出穂期(月/日)	7/25	7/25	7/31	-6	8/1	7/29	8/2	-1
籾長(mm)	6.82	6.90	7.24	94	7.09	6.79	7.24	98
籾幅(mm)	3.44	3.57	3.44	100	3.54	3.54	3.50	101
1株平均穂数	25.0	16.7	21.3	117	22.5	19.0	20.3	111
1穂平均籾数	69.1	75.0	69.1	100	60.2	74.3	74.9	80
1株当たり籾数	1,728	1,253	1,470	118	1,355	1,412	1,519	89

注) 平年値は、標植:H12～R7、晩植:H29～R7の平均値

⑩ 出穂前後の気象

標植の出穂期前1～20日間の気温は、最高、最低気温とも平年を上回り、また出穂期前10日間の日照時間は、かなり少なかった。出穂期後1～20日間（7月26日～8月14日）の積算平均気温は、488℃（平年差+6℃）、積算日照時間は139h（平年比114%）だった。しかし出穂期後1～10日間の積算気温はやや低く、日照時間もかなり少なく、日気温較差も小さかった。

晩植の出穂期前1～10日間は、最高気温が低く、最低気温は高かった。さらに出穂期前1～20日間の日照時間は、平年よりかなり少なく、日気温格差も小さかった。出穂期後1～20日間（8月2～21日）の積算気温は、506℃（平年差+27℃）、積算日照時間は180h（平年比146%）だった。

表－12 出穂期前後1日から10日間毎の気象経過（上表；標植、下表；晩植）

試験区	出穂期前・後日数	本年値・平年差・平年比%											
		平均気温		最高気温		最低気温		降水量		日照時間		日気温較差	
		本年 積算℃	平年差 ℃	本年 積算℃	平年差 ℃	本年 積算℃	平年差 ℃	本年 積算mm	平年比 %	本年 積算hr	平年比 %	本年 積算℃	平年差 ℃
標植	－30日（21～30日前）	213	9	271	19	161	－2	17	21	87	179	110	21
	－20日（11～20日前）	242	26	291	30	202	24	100	118	57	131	88	6
	－10日（1～10日前）	260	32	299	25	231	43	42	62	27	53	68	－18
	10日（1～10日後）	230	－11	269	－22	197	－2	209	357	41	68	73	－20
	20日（11～20日後）	258	16	323	30	200	1	0	0	99	158	123	29

数値は出穂期前日から10日毎、または出穂期翌日から10日毎の積算による。標植の本年の出穂期は7月25日

試験区	出穂期前・後日数	本年値・平年差・平年比%											
		平均気温		最高気温		最低気温		降水量		日照時間		日気温較差	
		本年 積算℃	平年差 ℃	本年 積算℃	平年差 ℃	本年 積算℃	平年差 ℃	本年 積算mm	平年比 %	本年 積算hr	平年比 %	本年 積算℃	平年差 ℃
晩植	－30日（21～30日前）	237	25	300	42	187	13	3	3	82	185	113	29
	－20日（11～20日前）	256	33	290	21	231	45	102	141	20	42	59	－25
	－10日（1～10日前）	236	－1	273	－14	211	15	199	332	22	39	62	－29
	10日（1～10日後）	246	4	309	15	189	－11	6	10	100	159	120	26
	20日（11～20日後）	260	23	319	31	213	18	9	12	80	134	106	13

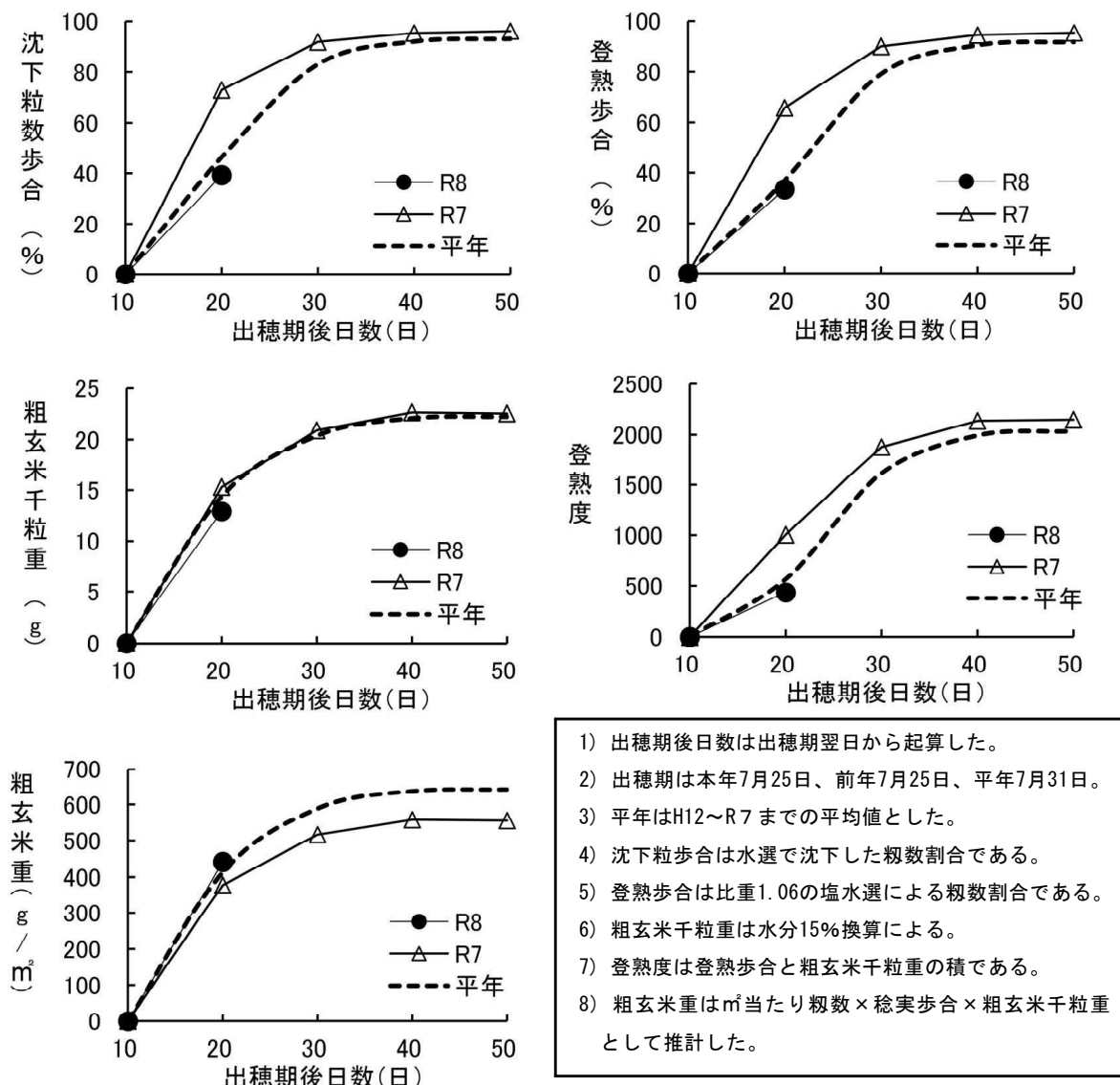
数値は出穂期前日から10日毎、または出穂期翌日から10日毎の積算による。晩植の本年の出穂期は8月1日

- 24 -

⑪ 登熟の推移

標植の出穂期20日後の沈下粒数歩合は39.2%（平年差-7.0ポイント）、登熟歩合は33.5%（同差-3.4）、粗玄米千粒重は12.9g（同比89.7%）、登熟度は433（同差-133）で、各項目で平年を下回り、粗玄米重は442g/m²（同比107%）で1株粒数が多いことから平年を上回った。

出穂10～20日後は高温多照で経過しているが、その前の出穂前10～出穂後10日間は少照で経過しており、初期登熟は平年より緩慢に進んでいると推測する。



図－12 標植における出穂期後20日間の各種登熟調査

(2) 直播作況試験

1) 幼穂形成期・減数分裂期

幼穂形成期の草丈は60.5cm（平年比90％）で平年より短く、 m^2 当たり茎数は708本（同比125％）と多かった。葉数は10.1葉（同差－0.5葉）と少なく、葉緑素計値は36.9（平年比93％）と低かった。

減数分裂期の草丈は79.2cm（平年比101％）で平年並、 m^2 当たり茎数は548本（同比95％）と少なかった。葉数は12.1葉（同差±0葉）、葉緑素計値は32.7（同比94％）と平年より低かった。

表－13 農試直播作況ほ場の生育概況（あきたこまち、湛水土中条播、5月11日播種）

生育 ステージ	草丈			m^2 当たり茎数			葉数			葉緑素計値		
	本年 (cm)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (葉)	前年差 (葉)	平年差 (葉)	本年	前年比 (%)	平年比 (%)
幼穂 形成期	60.5	80	90	708	142	125	10.1	-0.9	-0.5	36.9	97	93
減数 分裂期	79.2	95	101	548	117	95	12.0	-0.1	±0	32.7	95	94

注）平年値：過去10年間（H28～R7）の平均値

2) 出穂期・穂揃期

出穂期は8月6日、穂揃期は8月9日でいずれも平年より早かった。

穂揃期頃の生育は m^2 当たり穂数516本（平年比110％）、葉数12.0葉（同差－0.6葉）、1穂当たり着粒数59.6粒（同比85％）、 m^2 当たり籾数30.8千粒（同比99％）であった。

平年に比べ m^2 当たり穂数は多かったが、1穂当たり着粒数はかなり少なかったため、 m^2 当たり籾数は少なくなった。

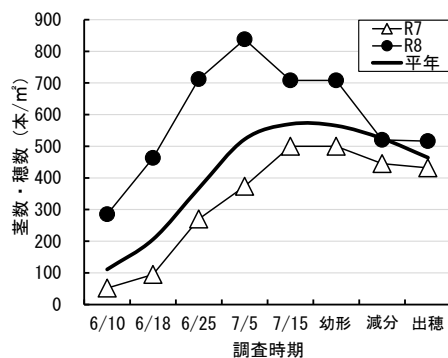
表－14 農試直播作況ほ場の生育概況（あきたこまち、湛水土中条播、穂揃期頃調査）

m^2 当たり穂数			葉数			1穂当たり着粒数			m^2 当たり籾数		
本年 (本)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (葉)	前年比 (葉)	平年比 (葉)	本年 (粒)	前年比 (%)	平年比 (%)	本年 (千粒)	前年比 (%)	平年比 (%)
516	119	110	12.0	-1.0	-0.6	59.6	80	85	30.8	95	94

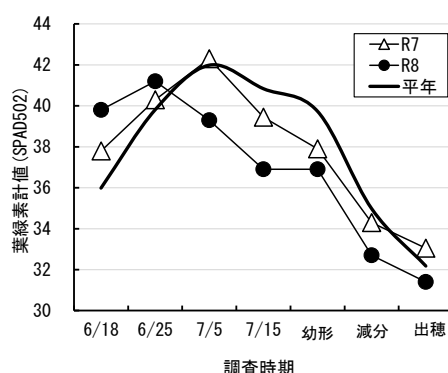
注）平年値：過去10年間（H28～R7）の平均値

3) これまでの生育経過

本年は苗立ち数を十分に確保できたこと、初期の分けつが旺盛だったことから、茎数はかなり多く推移したが、無効分けつの発生が多く最終的な穂数は平年並からやや多い水準にとどまった。葉緑素計値は生育前半はやや高めに推移していたが、7月以降、大きく低下し平年より低く経過した。これは茎数が過剰となったため、葉色が淡くなったものと推察される。また、1穂当たり着粒数は、平年よりかなり少なくなった。これは穂数が平年より多かったことに加え、無効分けつの発生が多く、葉色が淡かったことが要因として考えられた（表－13、14、図－13、14）。



図－13 直播作況ほの茎数の推移



図－14 直播作況ほの葉緑素計値（SPAD値）の推移

(3) 定点調査ほの出穂後の気象経過と生育および刈り取り適期

1) 出穂期と登熟前半の気象経過

水稻定点調査ほ（あきたこまち）の出穂期は、全県で平年より3日早かった。しかし、ほ場内での出穂にバラツキが大きく、出穂開始から穂揃までの期間は、平年より長かった。

各地域とも出穂期翌日から8月23日までの積算気温は、平年より高く、積算日照時間もかなり多く、高温多照で経過している。

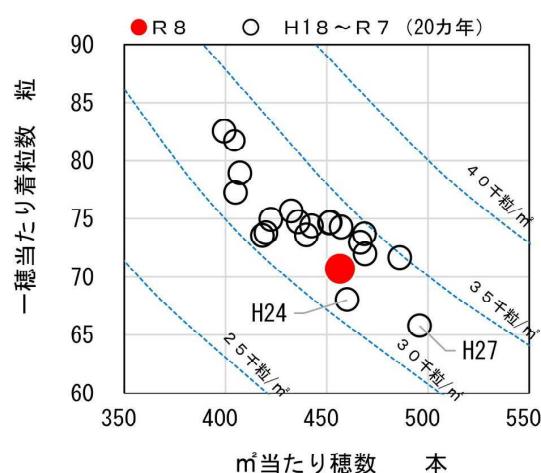
表－15 水稻定点調査「あきたこまち」出穂期翌日からの積算気温と積算日照時間（8/23まで）

地域	出穂期			出穂期翌日～8/23						
	R8 (月/日)	平年 (月/日)		(日数)	積算気温 (℃、%)			積算日照時間 (h、%)		
					R8	平年	平年比	R8	平年	平年比
鹿 角	7/29	8/2	25	609	(577)	105	171	(138)	124	
北秋田	7/28	7/31	26	655	(624)	105	201	(151)	133	
山 本	7/27	8/1	27	688	(662)	104	212	(168)	126	
秋 田	7/26	7/30	28	745	(708)	105	223	(168)	133	
由 利	7/29	8/2	25	646	(619)	104	200	(163)	123	
仙 北	7/29	8/2	25	643	(615)	105	194	(150)	129	
平 鹿	7/31	8/3	23	605	(575)	105	176	(134)	131	
雄 勝	7/29	8/2	25	628	(606)	104	181	(149)	122	

注) 出穂期は各地域振興局調査による。

2) 水稻の生育状況（穂揃期調査）

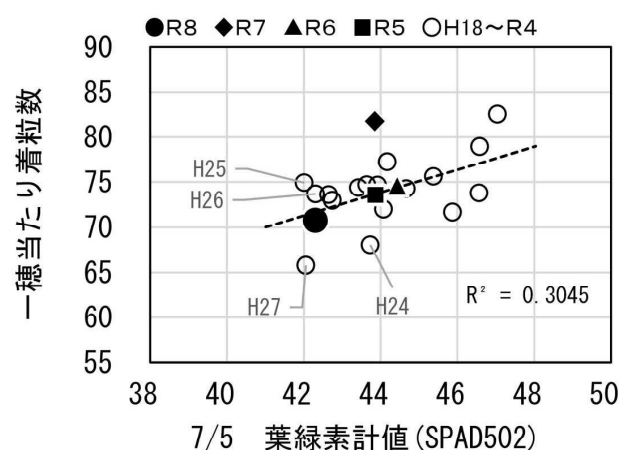
8月20日現在、1穂当たり着粒数は、平年比94%と少ないが、穂数は平年比105%で多く、㎡当たり粒数は32.3千粒で平年並だった。㎡当たり粒数は収量構成要素の目標値を上回っており、今後は十分な登熟が得られるよう、登熟期後半の管理を徹底する。



図－15 穂数と1穂当たり着粒数および粒数の関係

注1) 水稻定点調査ほの年次平均（H18～R7）とR8平均を図示

注2) 図中斜線は㎡当たり粒数を表す



図－16 7/5(最高分けつ期頃)の葉緑素計値と穂揃期1穂当たり着粒数の関係

注1) 水稻定点調査ほの年次平均（H18～R7）とR8平均を図示

注2) 図中直線は近似線（1次式）を表す

1 穂当たり着粒数が少ない年次は、過去20年を振り返ると平成27、24年があり、最高分げつ期（7月5日）頃の葉緑素計値が低いなど、およその要因は推測される。

しかし、調査は場単位で1穂当たり着粒数の低下要因を推定すると、上記の要因のほかに7月上旬の茎数が多いほ場であることや、6月下旬から7月上旬の茎数の増加量が多いほ場や、7月上旬から7月中旬にかけて茎数の低下または葉色の低下が多いほ場などが該当した。即ち、不安定な生育経過のほ場で着粒数の低下が多いと考えられる。

3) 刈り取り適期の判定（稲作指導指針p.81～82を参照）

水稻定点調査ほ「あきたこまち」の出穂期から、刈り取り適期を各地アメダスの積算気温により推計すると、鹿角は9月9～14日、北秋田は9月7～12日、山本は9月4～8日、秋田は9月1～5日、由利と仙北は9月6～10日、平鹿は9月7～12日、雄勝は9月7～11日である。今後も高温で経過すると、これらから2日程度早まる可能性があり、各ほ場の刈取予想においても留意する。最終的な刈取判断は、籾の黄化程度90%とする。

8月20日調査による「あきたこまち」の㎡当たり籾数は、平年並～平年をやや下回るものの、高温多照で経過していることから登熟の進みは、順調と推定される。しかし、ほ場内の出穂がバラついたことから、刈取適期を適正に判断し、刈り遅れに最も注意する。

表－16 積算気温及び日照時間による刈り取り時期の目安（8/23まで）

地域	出穂期		積算気温の到達日※		積算日照時間到達日※	
	R8 (月/日)	平年 (月/日)	950℃ (月/日)	1050℃ (月/日)	200h (月/日)	265h (月/日)
鹿 角	7/29	8/2	9/9	9/14	8/29	9/11
北秋田	7/28	7/31	9/7	9/12	8/25	9/6
山 本	7/27	8/1	9/4	9/8	8/22	9/1
秋 田	7/26	7/30	9/1	9/5	8/21	8/31
由 利	7/29	8/2	9/6	9/10	8/23	9/3
仙 北	7/29	8/2	9/6	9/10	8/25	9/6
平 鹿	7/31	8/3	9/7	9/12	8/28	9/9
雄 勝	7/29	8/2	9/7	9/11	8/27	9/8

注）出穂期は各地域振興局調査による水稻定点調査ほの平均

※あきたこまち570kg/10a収量水準での刈り取り適期判断の目安。

用語解説：「出穂期後の積算気温、積算日照時間」

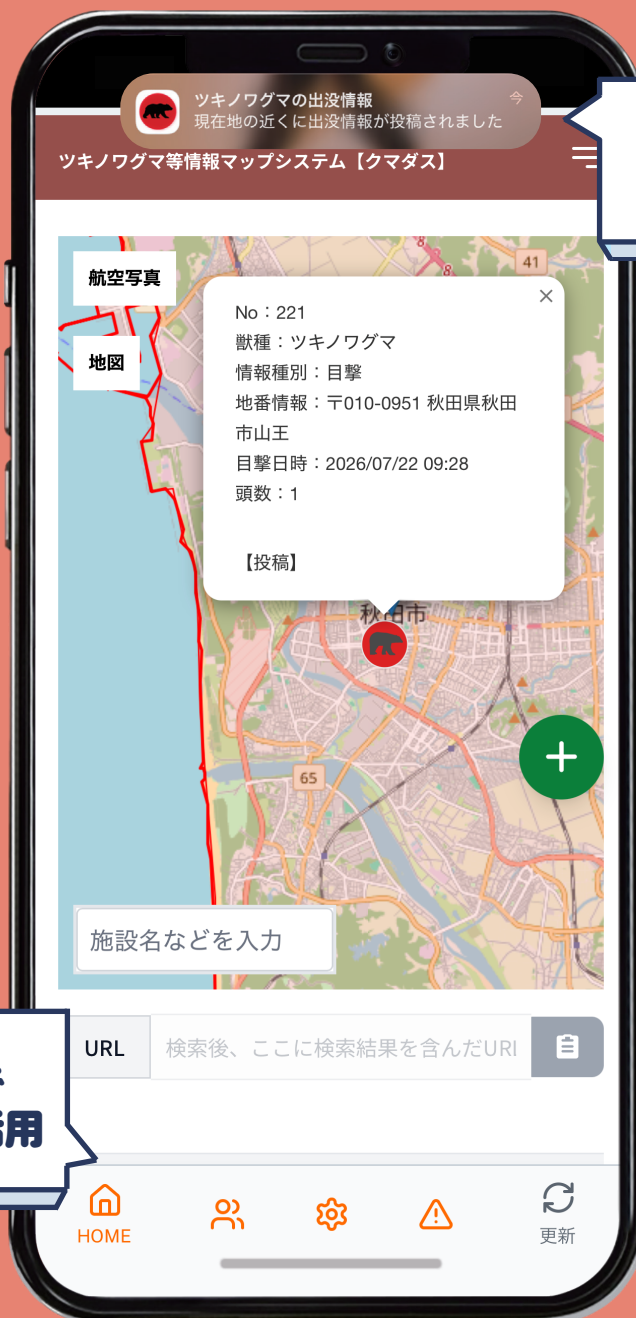
- ・「出穂期後の積算気温、積算日照時間」とは出穂期の翌日から日々の平均気温、日照時間を積算したもの。
- ・出穂期とは穂揃期のことではなく、全茎数の40～50%が出穂した時期のこと。
- ・出穂とは止葉の葉鞘から穂の先端（芒は含まない）が現れること。

8月5日 (水) AM 9:00 リリース

クマダスアプリ



周辺のクマ目撃情報を迅速に受信！



プッシュ通知で
すぐにお知らせ



アプリ DL は以下から



ペアリング機能で
家族の見守りに活用

詳しい機能・使用方法是裏面へ▶

秋田県生活環境部自然保護課・ツキノワグマ被害対策支援センター

クマダスアプリの主な機能



即時公開

投稿された情報は即座に反映



プッシュ通知

- ・ 現在地周辺を目撃情報受信
- ・ 外出中や旅行中の安全確認に活用



注意喚起通知

市町村からの注意喚起を
プッシュ通知でお知らせ



ペアリング機能

お子様の外出先付近での
目撃情報を保護者が受信

通知設定



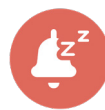
通知範囲

現在地からの距離（半径 500m/1km/3km）
を設定できます



通知対象の時間

目撃日時からの経過時間
（30分 / 1時間 / 3時間以内）を設定できます



通知停止時間帯

睡眠中など、通知の受信を一時的に停止する
時間帯を設定できます



対象の獣種

クマ、イノシシ、ニホンジカの中から
獣種を選択できます



情報種別

目撃情報、人身被害、痕跡など必要な情報を
選択できます

ご利用にあたって ~皆さまへのお願い~

- クマ等を目撃した際には、アプリへの投稿にご協力をお願いします。
- 投稿する際には、SMS 認証（携帯電話番号による認証）をお願いします。
投稿の内容について市町村や県から確認する場合があります。
- 取得した位置情報及び個人情報、本アプリの目的以外には使用しません。
- フンや足跡などの痕跡情報の投稿には、写真の添付が必要です。
大きさを比較できるようなもの（靴や小物など）を入れて撮影いただくようお願いします。
- 人家周辺など緊急性の高い場所で目撃した際は必ず警察や市町村への通報をお願いします。



各地域における技術情報等のお知らせ

各地域における技術情報等についての問い合わせは、最寄りの地域振興局農林部農業振興普及課に電話またはFAXでお願いします。

各地域振興局	電話番号	FAX番号
鹿 角 地域振興局農林部農業振興普及課	0186-23-3683	0186-23-7069
北秋田 地域振興局農林部農業振興普及課	0186-62-1835	0186-63-0705
山 本 地域振興局農林部農業振興普及課	0185-52-1241	0185-54-8001
秋 田 地域振興局農林部農業振興普及課	018-860-3410	018-860-3363
由 利 地域振興局農林部農業振興普及課	0184-22-8354	0184-22-6974
仙 北 地域振興局農林部農業振興普及課	0187-63-6110	0187-63-6104
平 鹿 地域振興局農林部農業振興普及課	0182-32-1805	0182-33-2352
雄 勝 地域振興局農林部農業振興普及課	0183-73-5114	0183-72-6897

OSNS（ソーシャルネットワーキングサービス）LINEで情報発信を行っています

秋田県稲作技術情報

「秋田の米ぢから」



水稻栽培に関する情報をリアルタイムで発信しています。

<主な配信内容>

- ・ 秋田県内の水稻の生育状況
- ・ 水稻および大豆の技術情報
- ・ 異常気象対策
- ・ その他、秋田米に関する情報



こちらから
登録できます

記事についてのお問い合わせは

秋田県農業試験場
秋田県病虫害防除所
秋田地方气象台
東北農政局秋田県拠点
秋田県農林水産部水田総合利用課（農産・複合推進チーム）
園芸振興課（調整・普及チーム）

TEL 018-881-3330
TEL 018-881-3660
TEL 018-864-3955
TEL 018-895-7303
TEL 018-860-1786
TEL 018-860-1801

【次回の発行日は12月18日（金）の予定です】